イスパニカ 8 (1963) p.36

(11) David Thomson: World History from 1914 to 1950 (現代の世界　中野好夫, 中村英勝訳　紀伊国屋書店)
(12) 増田四郎　歴史と現実 (思想　1963年6月号所載)
(13) 上原専録　世界史像の問題 (井上幸治・林健太郎編　西洋史研究入門　東京大学出版会　所載)
(14) José Ortega y Gasset: La Rebelión de las Masas 1930. (佐野利勝訳　筑摩書房)

学会記録

日本イスパニヤ語学会の活動 (3)

第八回大会 (東京外国語大学　東京　昭和37年11月3日)　(1962)

初期イスパニア文学のゲルマン要素

京都外国語大学　近松洋男

五，六世紀に盛に歌われたゲルマン英雄詩は北西ヨーロッパ各国に保存され十一世紀に各国語でかきあらわされた。イスパニアでは西ゴート族はローマ化を急ぐあまり自己の英雄詩を軽蔑し終に禁止さえしたが，カスティリャの自由な雰囲気のもとに復活し El mio Cid に結実する。次に半母音 /j/ と /w/ についても西ゴート語の法則がイスパニア語のそれに対応する。「r, l, m, n 及び b, d, g, s の前又は後で /j/, /w/ が現れる」——起半母音現象。

「ドン・キホーテ (正篇)」に於ける vuestra merced のシンタックスの面から見た特徴

京都外国語大学　秦　隆昌

人称代名詞の直接，間接補語の形は次の三種に大別する事が出来る。

(1) A型 (弱形) ——me, te, le, etc.
(2) B型 (強形) ——a mí, a ti, a él etc.
(3) C型 (複合形) ——me ... a mí, te ... a ti, le ... a él, etc. または a mí ... me, a ti ... te, a él ... le, etc.

この中B型は一般の文法書では正しくない形として取扱われている場合が多いが，この形は実際に使用されており，その使用頻度は時代を逆上るに従って多くなっている。一方「ドン・キホーテ (第一部)」では vuestra merced に於て特にB型の使用頻度が多い。これ等の問題を統計的に調査し，用法の変化を歴史的に考察した。

イスパニカ 9 (1964) p.29

学会記録

日本イスパニヤ語学会の活動 (4)

第九回大会 (神戸市外国語大学　神戸　昭和38年11月15日)　1963

バルメスにおける現代的意義

小樽商科大学　一色忠良

護教論者，哲人乃至は操觚者として半世紀前にメネンデス・イ・ペラーヨはバルメスを現代に掘り起しているが，知性と信仰の一致，資本主義と社会主義の問題，その他の新しい社会問題が次々に生起しておる現在，十八世紀前半の激しい時代に生きた，ネオスコラ哲学の先駆者とも云えるバルメスを，現代の場で考えてみたい。

俗語ラテン語の起半母音現象の必要十分条件

京都外国語大学　近松洋男

俗語ラテン語の母音 o, e の重母音化及び子音の yod 化は /j/ 音をひきおこすことに於て共通な現象であり，主として流音・鼻音により促進される。(起半母音現象) 必要条件

この現象が起半母音要素 l のみで支配されているときの十分条件は $\frac{dy}{dx}=\frac{dy}{dl}\cdot\frac{dl}{dx}$ であり，いくらかの非起半母音要素 p もあずかっているときは $\frac{dy}{dx}=\frac{\partial y}{\partial l}\cdot\frac{dl}{dx}+\frac{\partial y}{\partial p}\cdot\frac{dp}{dx}$ である。

古代イスパニヤ語に於ける人称代名詞の補語の重複について

京都外国語大学　秦　隆昌

人称代名詞の補語を重複させる傾向はセルバンテスの時代には既に一般化し，強調表現の場合には殆どこの重複補語が使用されている。しかし古代イスパニヤ語に於てはこの重複補語よりも強補語 (即ち，前置詞 a＋人称代名詞の対前置詞格の形) が強調表現の場合にはより多く使用されている。この間の表現形式の選択の推移を歴史的に考察して見た。

Método para enseñar la prounciación de la /l/, /r/ y /rr/ del español a japoneses.

スペイン文学における問題点のとらえ方を教えていると思える本書が多くの研究者の目にふれることを望みたい。

なお，著者はシワシントン大学のローマンス語の教授でペレス・ガルドスやピオ・バローハの研究者でもある。（大島　正）

(Sherman H. Eoff: *The modern spanish novel*, New York University Press 1961, $ 6.00)

学会記録

日本イスパニア語学会の活動(2)

第七回大会（南山大学　名古屋　昭和36年10月12日）(1961)

研究発表要旨

1. スペイン語半母音の音素論的解釈について

東京外国語大学　原　誠

Bowen-Stockwell は，/i, u/ を syllabic にしか認めず，non-syllabic な場合はすべてこれを /y, w/ に帰した。また Alarcos Llorach は /y, w/ を # SV または VSV におけるSの環境にのみ限定した。しかし私見によれば音素 /y, w/ を立てることは不要と思われるので，その理由を主として前二者への反論の形で述べる。

2. イスパニヤ語の動詞活用

早稲田大学　島岡　茂

イスパニヤ語の動詞活用形を，語尾，語幹の双方から考察すると，文法カテゴリーに応じて大体三つの枠に分けることができる。次にふつう六十余に分けられる不規則動詞の形を，その不規則性に応じて整理すれば約二十余に分類できる。これらの方法をフランス語などの場合と比較しながら説明する。

3. 名詞のスタイルとしての冠詞

拓殖大学　瓜谷良平

冠詞に関する文法上の諸学説によってもうずめることのできない隙間がかなりの面積にわたって存在し，この隙間の説明には文体論に逃げこむしか方法は見出されないことは現代ヨーロッパ各国語ともに常識のようであるが，スペイン語ではどうかという問題，および日本語に存在しない冠詞を，意味とか機能とかいった面からではなく，文体論的に，日本語に於ける接頭辞「お」との類似点の比較対照を試みた。

4. ルイス・デ・アラルコンの特殊性について

東京外国語大学　会田　由

黄金世紀のスペインの劇作家の諸巨匠の中で，アラルコンだけが極めて特異な存在だということは誰しもが知っていることだ。モンタルバンが Extrañeza と指摘していることでも，同時代の人々さえこれを認めていたことが分る。彼の代表作《疑わしい真実》を中心に，この特異性の由って来たる原因までさかのぼって述べる。

後　記

第6号に比較して，原稿の集まりが悪く，編集に困ったが，いい資料が辻井氏から寄せられ，なんとか第7号ができ上った。

東京，関西双方の編集委員が協議し，意見を持ちよれるかっこうになったことも，よかったと思う。

印刷代の値上がりのため，6号より頁数を減らさねばならなかった。第8号からは小さいながらも，ぴりっとした学会誌に育てたいものである。（編集委員会）

イスパニカ 6
(1961) p.55

学会記録

日本イスパニヤ語学会の活動(1)

第一回大会（東京外国語大学，昭和30年12月4日） 1955

町田俊昭　現代スペイン語の与格の機能について
大島　正　ベルナル・ディアスとメキシコ征服
会田　由　ロマンセについて

第二回大会（上智大学，昭和31年11月11日） 1956

会田　由　スペイン古典劇における体面感情について
大島　正　ウナムーノの三模範小説
大林多吉　中南米文学展望
町田俊昭　Aspecto——本質と応用理論としての形態——

第三回大会（大阪外国語大学，昭和32年10月12日） 1957

原　誠　再帰動詞の諸用法の検討
神代　修　スペイン内乱の特質について
町田俊昭　Rodericus Didas Castellanus の事蹟
宮城　昇　語順に関する若干の研究
高見英一　「ウワシプンゴ」とその社会的背景
瓜谷良平　冠詞の研究
吉田秀太郎　イスパニヤ語における俗語ラテン語の特徴

第四回大会（早稲田大学，昭和33年10月12日） 1958

近松洋男　イスパニヤ語に於けるゲルマン語の影響
宮前要平　カタルーニヤ語の発音について
大島　正　ガルシア・ロルカの詩における隠喩について
高見英一　「ウワシプンゴ」における語法の研究
鼓　直　La Vorágine について

第五回大会（天理大学，昭和34年10月10日） 1959

近松洋男　ラテン語動詞からイスパニヤ語動詞への移行経過
大島　正　瀑東綺譚におけるイバニエスの投影
島岡　茂　イスパニヤ語の動詞構造
高見英一　リカルド・グイラルデスの作品における語法の研究
辻井正衛　近代日本におけるイスパニヤ文学の位相

イスパニカ 6
(1961) p.56

第六回大会（拓殖大学，昭和35年11月12日） 1960

近松洋男　イスパニヤ音素と西ゴート音素との関係
大島　正　ガルシア・ロルカの詩における日本
会田　由　フロベールにおけるドン・キホーテの影響

日本イスパニヤ語学会会則

第一条　本会は日本イスパニヤ語学会と称し，事務所を東京外国語大学イスパニヤ研究室に置く。

第二条　本会はイスパニヤ語諸国の言語及び文学を主とする諸般の研究を目的とする。

第三条　本会は次の事業を行う。
1　年1回大会を開き，また随時研究会を開催する。　2　会報其他の刊行物を発行する。　3　海外諸団体との連絡を計る。　4　その他必要な事業を行う

第四条　会員は会則第二条に掲げる研究を行う者並びに本会の趣旨に賛成する者とする。入会は会員二名以上の推薦により理事会の承認を要する。

第五条　本会の経費は，会費，寄附金及び其の他の収入をもってこれにあてる。

第六条　会員を正会員，学生会員，維持会員，賛助会員とし，正会員は年額千円，学生会員は年額五百円，維持会員は正会員のうち特に年額二千円以上を会費として納入するものとし，賛助会員は本会の趣旨に賛同して寄附を行った者とする。他に名誉会員および顧問を置く事ができる。

第七条　本会に次の役員を置く。

会　長	1　名	理　事	15　名
副会長	1　名	監　事	2　名
理事長	1　名	委　員	若干名

会長，副会長，理事は正会員の互選による。
理事長は理事の互選による。
委員は理事会の指名による。
会長は会務を総括し，会を代表する。
副会長は会長を補佐し，会長事故あるときは会長の事務を代行する。
理事長は会務を施行する。理事会の招集は理事長が行う。
監事は会計を監査する。
委員は本会の事務処理に当る。事務の主なるものは左の通りである。
1　会計事務　2　機関誌の発行　3　庶　務

第八条　役員の任期は二年とし重任をさまたげない。

第九条　本会則の変更は大会の決議による。